

海外留学の中長期的なインパクト： 留学経験者と未経験者に対するオンライン 質問票調査結果の比較から

異文化間教育学会第37回大会（桜美林大学）

新見有紀子（一橋大学）

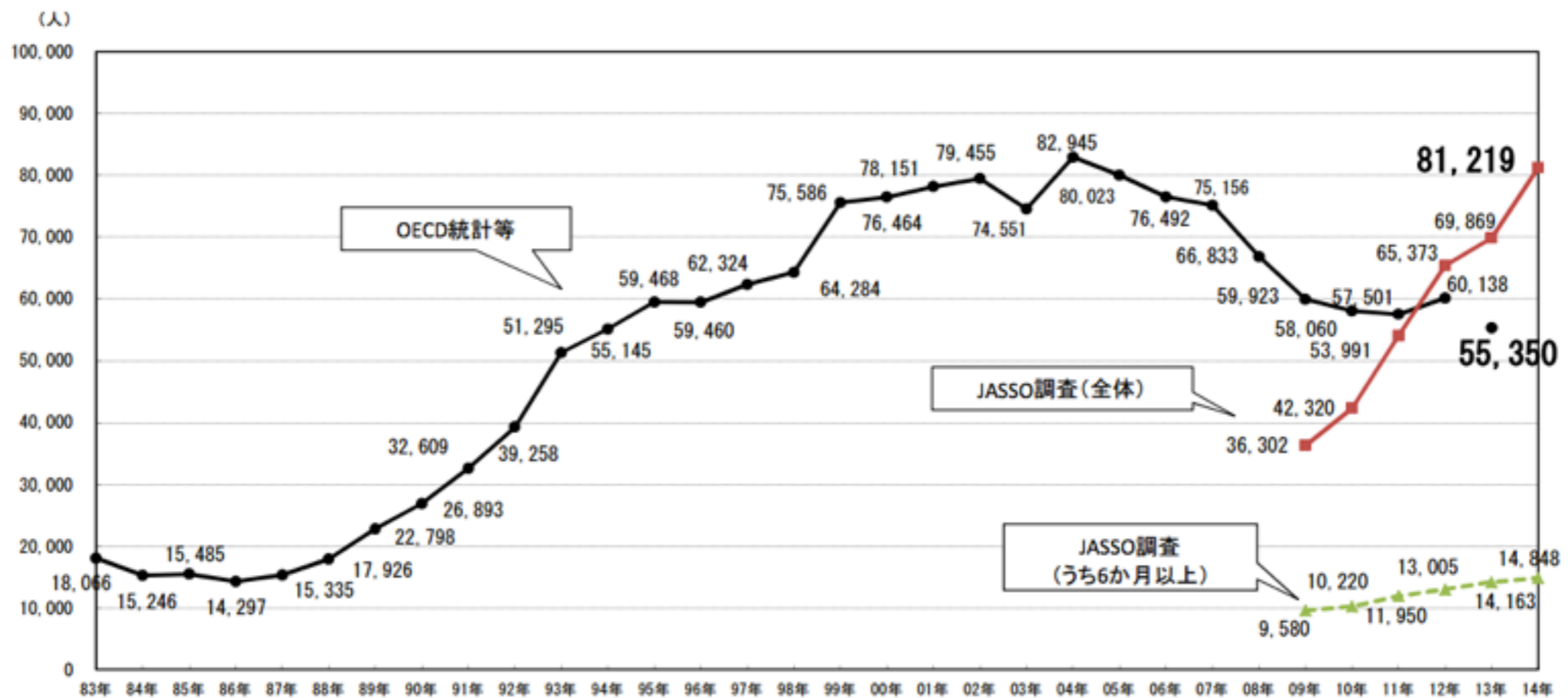
2016/6/5

本報告は、2013-15年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（A） 課題番号：25245078 「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する研究」の支援を受け、研究代表者（明治大学国際日本学部教授 横田雅弘）のチームで行ったものです。

背景①：海外留学状況

- 全世界における留学者数は2011年に450万人（OECD, 2014）
- 日本人の海外留学者数は、2013年に55,350人（文部科学省, 2016）※カウント方法も変更
- 日本の大学に在学中の留学者数（協定等に基づく・基づかない留学）は、2014年度に81,219人（日本学生支援機構, 2016）

ユネスコ統計局, OECD, IIE等における統計, 並びに(独)日本学生支援機構の調査による日本人の海外留学者数の推移



(出典) OECD統計等: OECD「Education at a Glance」、ユネスコ統計局, IIE「Open Doors」、中国教育部, 台湾教育部
JASSO調査: 「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」((独)日本学生支援機構)

背景②：海外留学に関する取り組み

受け入れから送り出しへの転換

- 2020年度までに日本人の海外留学者数を12万人へ
(日本再興戦略：Japan is Back、2013年6月14日閣議決定)

学生向け

- 「海外留学支援制度」 日本学生支援機構
 - 2016年度には23,000人（協定派遣型）、270人（大学院学位取得型）に対する奨学金
- 2014年～「官民協働海外留学支援制度トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」（文部科学省と民間企業）
 - 2016年度は、現時点までで932人

大学向け

- 2012年～「グローバル人材育成支援」事業
- 2014年～「スーパーグローバル大学創生支援」事業

先行研究

留学のインパクトに関する大規模な調査

留学の中長期的なインパクトにかかる先行研究（米国）

Study Abroad for Global Engagement (SAGE)

- 1960年から2005年までの約50年間に海外留学した6,378名と、留学未経験者5,924名に対してサーベイ調査を実施。
- さらに留学経験者63名に対するインタビューと複数のケーススタディを実施。
- インパクトの焦点：留学経験の長期的なインパクトとしてグローバルエンゲージメント（国際社会貢献）の5つの側面（市民としての行動、知の創造、フィランソロピー、社会起業、質素儉約）、および、留学後の進学やキャリア選択への影響について。（留学が留学経験者個人だけではなく社会へ与える影響を議論。）
- 留学経験は、特に質素儉約の態度や、留学後の進学・キャリア選択という留学経験者の人生にわたり影響を与えることが明らかになった。
- 本研究調査票の作成においては、SAGEの調査票を参考にし、SAGE研究代表者の一人のDr. Fryにも助言を求めた。

留学の中長期的なインパクトにかかる先行研究（米国）

- **Georgetown Consortium Project :**

O'Rear, I., Sutton, R. C., & Rubin, D. L. (2011等)に報告されている、2003年からの3年間に渡る留学の効果に関する大規模な調査研究。米国内の190の大学における留学経験者（1159名）と、同時期に米国内の大学でのみ学修していた者（138名）に対して、留学期間の前後に外国語運用能力と異文化感受性に関するテスト実施。その結果、留学経験者の方が対照群よりも、それぞれのスコアがより大きく向上していた。

- **GLOSSARI Project :**

ジョージア州立大学機構における留学のインパクトに関する調査（Vande Berg, M., Connor-Linton, J., & Paige, R. M., 2009等）。大学在籍時の留学経験者（19,109名）と留学未経験者（17,903名）に対し、大学入学時のSAT試験の点数で分類されたグループごとに大学卒業率やGPAについて比較をしたところ、そのどちらについても留学経験者の方が高かったという結果が示された。

留学の中長期的なインパクトにかかる先行研究（国内）

- 日本学生支援機構が海外留学経験者に対して2004年と2011年にインターネットによる追跡調査を実施。2011年の調査では、過去15年以内の留学経験者1,506人から有効回答を得た。調査結果では、留学で得られたものとして、視野の広がり、語学力や異文化理解力の向上、友人、価値観・考え方の変化などが上位に挙げられた。
- 野水・新田（2014）は、短期海外派遣留学の効果に関する調査を実施。短期留学が学業、語学、異文化理解、進学・就職、個人としての成長等に役に立っているとの経験者による自己評価が示された。
- しかし、これらの報告では、比較対照群（留学未経験者）を用いて検証をしていない。

理論的背景：変容的学習理論

- メジロー（2000）によると、変容的学習とは、ものの見方や考え方、感じ方、行為の仕方等、個人によって習慣的に行われてきた準拠枠（frame of reference）が、批判的な振り返り（省察）を通じて変容していくことを伴う学習を指す（常葉—布施,2004）。成人の学習理論の中で主要な理論として参照されている。
- 海外留学経験も、文化や言語の異なる社会の中で学業に励み、現地の人々と交流することで、自ら持っていた価値観、考え方、態度が再検討され変容していくという、変容的学習をもたらす機会である。

メジローの変容的学習理論による、認識の準拠枠の変容

- ・パターン1既存の準拠枠の精密化
- ・パターン2新たな観点の学習
- ・パターン3**批判的省察**と観点の変化
- ・パターン4**心的傾向の変容**

変容的学習は、認識の準拠枠の変容、すなわちパターン3とパターン4のように、観点の変容と心的傾向の変容が起こったとき起こるものであるとしている（藤村, 2006）。

留学経験でも、新しい文化・言語の環境の中で新たな観点の学習が起こり、そこで批判的省察をつうじて、観点が変化し、心的傾向も変容すると考えられる。

研究の概要

研究の目的・本報告における焦点

- 本研究プロジェクトの目的：日本人の留学経験者を対象に、留学経験が能力、意識、行動、価値観、キャリア、人生の満足度を与えた中長期的なインパクトについて、留学未経験者との比較分析により明らかにする
- 本報告における焦点：授業に関する経験と、能力の向上・意識の変化について焦点を当てる
 - ①学部留学・大学院留学経験者と留学未経験者（国内学部卒業・国内大学院修了者）の回答傾向の違い
 - ②**授業関連の経験**と、能力の向上・意識の変容への関連

本報告における研究課題

- 研究課題①：学位取得を目的とした学部・大学院留学経験者と、留学未経験者（日本の国内学部卒・国内大学院修了者）の4つのグループでは、**授業に関する活動、能力の向上、意識の変容**に関する自己評価に基づく回答にどのような違いがみられるのか？
- 研究課題②：学部・大学院留学経験者のどのような授業関連の経験が、能力の向上および意識の変容に**影響を与えたのか？**

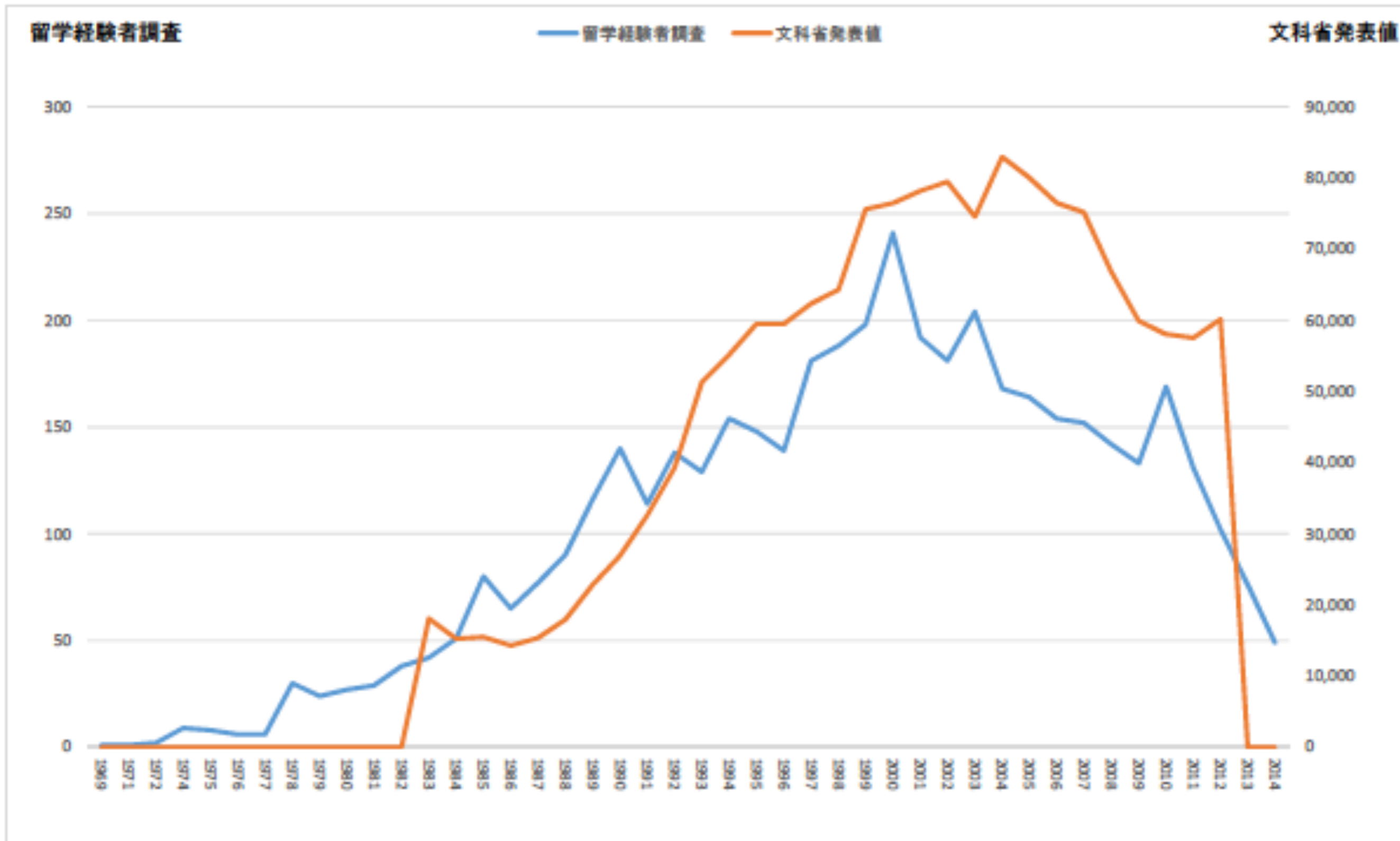
調査対象者（留学経験者）

- 初等・中等教育を主として日本で受け、高校卒業後、勉学を主たる目的として3ヶ月以上、海外の大学、大学院、短期大学、専門・技術・芸術学校、語学学校に在籍した人（高校卒業後に留学をしていれば、高校在学中の留学経験者も含める、留学中の「勉学」には、語学研修、インターンシップ、フィールドワーク等を含むが、ボランティア活動やワーキング・ホリデーは含まない。）
- 現在または過去に社会人を経験したことがある人。

データ収集

- 当該研究関係者のネットワーク、国際教育等の分野に関連したメーリング・リストおよびソーシャル・メディアを通じた周知および民間調査会社のモニターに対して、オンラインによる質問票調査を2014年12月から2015年5月上旬まで実施。
- 有効回答数：4,489件

本調査対象者（4,489）と文科省発表値



本調査の参加者には、留学直後の参加者は少なめとなっているが、留学の中長期的なインパクトの調査としていたことが影響していると考えられる。

本報告での分析対象（留学経験者）

- 海外の学部課程において、学位取得を目的とした3年間以上の留学した者（以降「学部留学」）416名
- 海外の大学院課程において、学位取得を目的とした1年以上の留学した者（以降「大学院留学」）353名
- 複数回留学経験のある者については、回答者が「最も重要な留学」と選択した留学先学校（段階）種別で集計
- 職場からの財政支援を主な留学費用負担方法とした人を除く

調査対象者（比較対照群・留学未経験者）

- 国内の大学卒業または大学院修了者
- 3ヶ月以上の海外留学や海外在住経験がなく、外資系を含む日本に存在する企業に勤めている人、もしくは主婦または無職の人
- 国内の大学・大学院の入学前に外国語運用能力を身につけていなかった、家庭内で外国語を利用していなかった、国内のインターナショナル・スクールに通ったことがない、帰国子女ではないという人

データ収集

- 留学経験者の回答者における年代別構成比率に相似するよう割付を調整し、調査会社のモニターに対して、オンラインによる質問し調査を2015年8月から9月にかけて実施。
- 有効回答数：1,298件

質問票の構成

- フェイスシート
- 留学中の経験（中間ファクター）
- 留学後のインパクト

- 留学（留学未経験者の場合は国内の大学・大学院での学修と学生生活）のインパクトに関するほぼ全ての項目について、リッカート法の4段階尺度により評価を依頼。

調査項目：留学中の授業に関する経験
(留学未経験者は国内の学部・大学院における経験)
についての5項目

授業で積極的に発言した	つよくそう思う (4点) そう思う (3点) あまりそう思わない (2点) 全くそう思わない (1点)
先生と積極的に交流した	
クラスメートと積極的に交流した	
宿題に積極的に取り組んだ	
授業内のプレゼンテーション (発表や準備) に積極的に取り組んだ	

調査項目：能力の向上に関する18項目

専門知識・技能	目的を達成する力
基礎学力・一般教養	柔軟性
外国語運用能力	協調性
コミュニケーション能力	社交性
留学先（外国）の社会・週間・文化に関する知識	創造力・クリエイティビティ
リーダーシップ	忍耐力
積極性・行動力	問題解決能力
異文化に対応する力	批判的思考力
ストレス耐性	論理的思考力
つよくそう思う（4点） そう思う（3点） あまりそう思わない（2点） 全くそう思わない（1点）	

調査項目：意識の変容に関する16項目

日本人としての意識が高まった	社会での男女共同参画の意識が高まった
アジア人としての意識が高まった	性別に捉われず家庭内における役割を担うことへの意識が高まった
地球市民としての意識が高まった	宗教に関する寛容性が高まった
政治・社会問題への関心が高まった	リスクをとること、チャレンジすることに関する意識が高まった
外交・国際関係への興味が高まった	価値判断を留保して、なぜそうなのかを考えようとするようになった
環境・ひん鋼問題等の地球的課題に対する意識が高まった	自己肯定感（自信）が高まった
平和に対する意識が高まった	自己効力感（自分はやるべきことを実行できるという意識）が高まった
多様な価値観や文化的背景を持つ人々と強制する意識が高まった	自己有用感（社会の中で自分は必要とされているという意識）が高まった

つよくそう思う（4点） そう思う（3点）

あまりそう思わない（2点） 全くそう思わない（1点）

性別・年代別調査対象者

	性別		年代			
	男	女	50歳代以上	40歳代	30歳代	20歳代以下
学部留学 (416)	52.4%	47.6%	13.5%	42.1%	34.9%	9.6%
大学院留学 (353)	58.9%	41.1%	27.8%	37.7%	28.3%	6.2%
国内学部卒業 (710)	53.7%	46.3%	20.3%	34.4%	32.0%	13.4%
国内大学院修了 (528)	61.0%	39.0%	12.5%	34.5%	37.3%	15.7%

留学先国別調査対象者

	アメリカ	イギリス	オーストラリア	カナダ	ドイツ	フランス	中国
学部留学 (416)	71.8%	6.0%	2.2%	4.1%	1.9%	0.5%	1.9%
大学院留学 (353)	57.2%	21.5%	4.5%	2.5%	2.8%	2.5%	0.8%

調査対象者の属性①

留学開始時の年齢

- 学部留学経験者：18-21歳までの間で 66.1%、**20歳代以下が全体の93.8%を占めた。**
- 大学院留学経験者：23-29歳までで62.6%、30歳代で29.5%と、**20代中盤から30代での留学が主。**

留学期間

学部留学者は3年以上の者で抽出（内訳）

- 3年以上4年未満（41.1%）
- 4年以上5年未満（36.3%）
- 5年以上（22.6%）

大学院留学者は1年以上の者で抽出（内訳）

- 1年以上2年未満（36.0%）
- 2年以上3年未満（32.0%）
- 3年以上（32.0%）

調査対象者の属性②

大学院の分野別

- 留学経験者：理系が15.6%、文系が84.4%
- 国内大学院修了者：理系が60.6%、文系が39.4%

留学資金の支弁方法「私費」と回答した者

(残りは奨学金受給者)

- 学部留学者の95.9%
- 大学院留学経験者の72.8%

分析方法

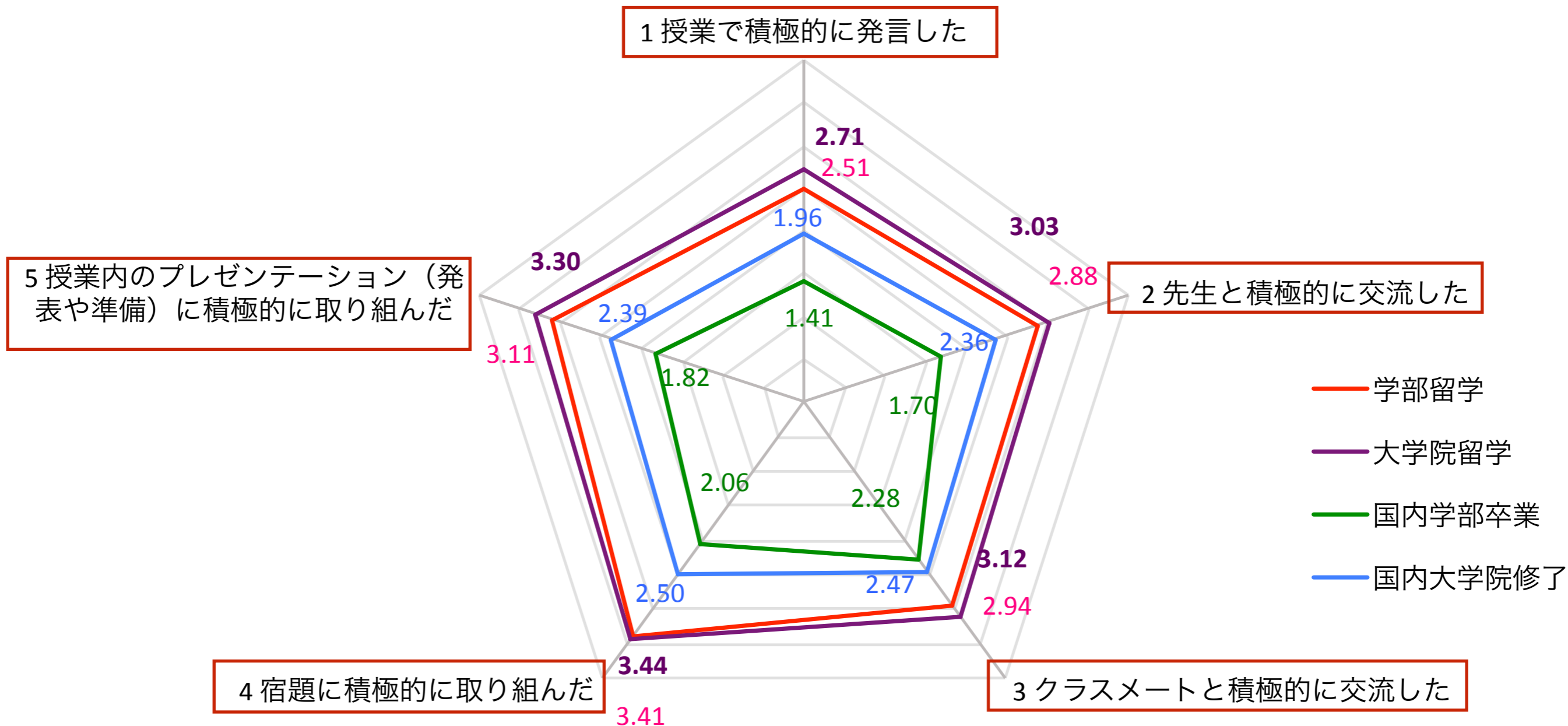
- ① 4 グループの回答傾向の違い
 - 各項目について、「つよくそう思う」（4点）「そう思う」（3点）「あまりそう思わない」（2点）「全くそう思わない」（1点）として、加重平均値を算出し、グループ間で比較をした。
 - t -test（両側）を実施。
- ② 授業に関する経験の、能力の向上・意識の変容との関連
 - 「授業に関する経験」と「能力の向上」の相関係数、および、「能力の向上」と「意識の変容」に関する相関係数を算出。
 - 相関係数を参考にしながら、回帰分析を行い、授業に関する経験→能力の向上→意識の変容に関連する変数を特定。

結果報告

①留学経験者と未経験者・

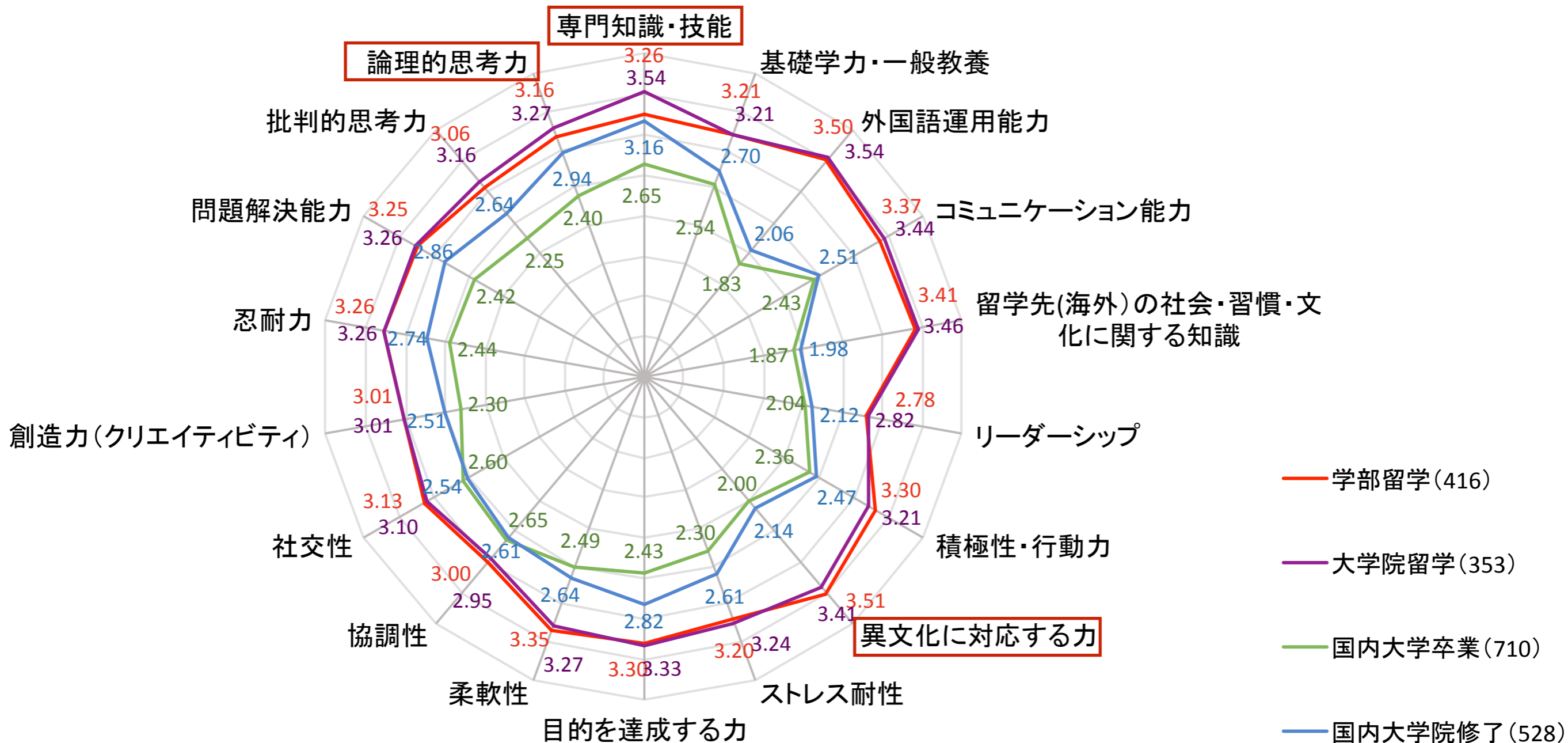
学部留学と大学院留学経験者の回答の比較

授業関連の活動に関する項目



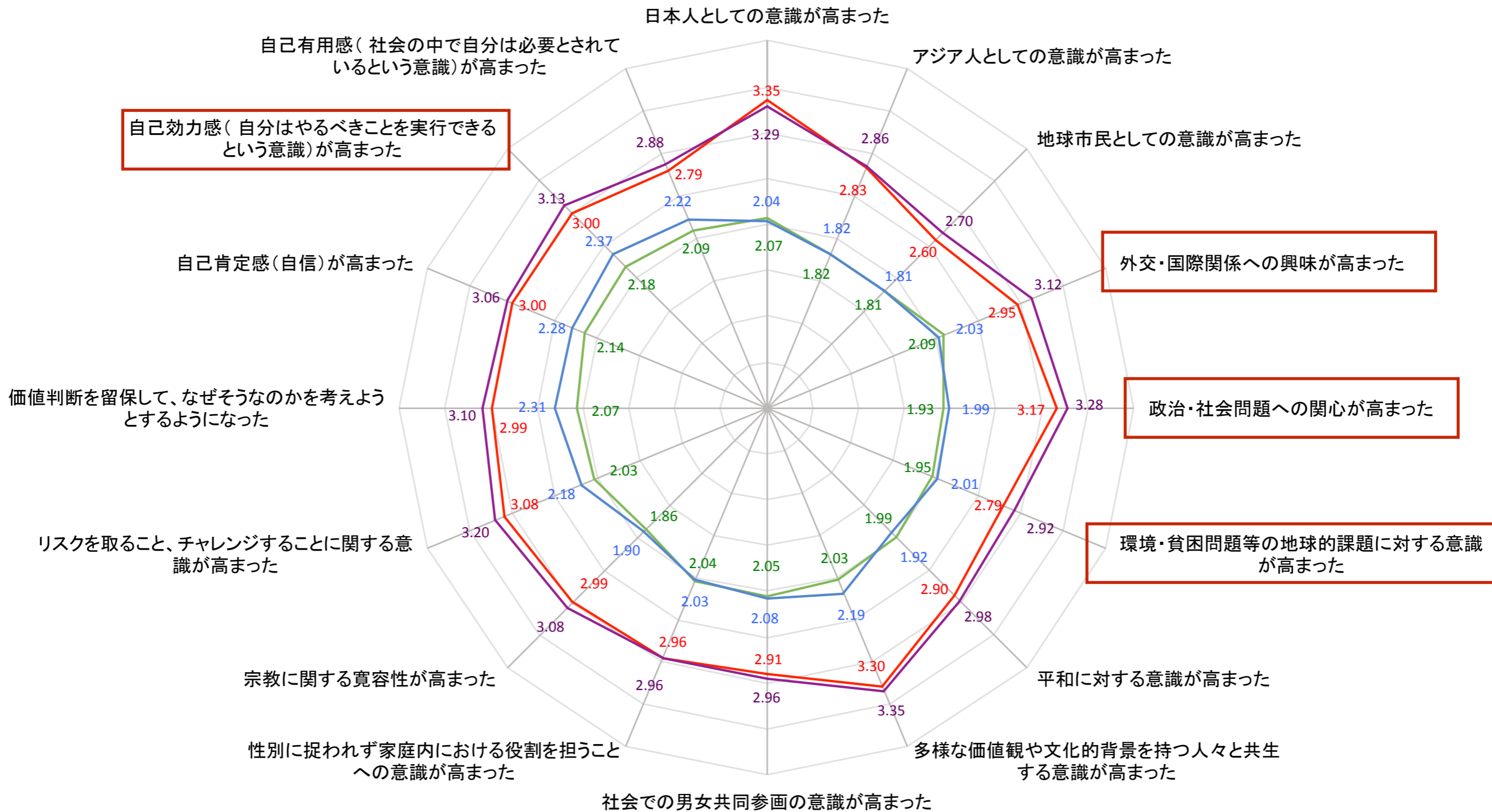
- ・ 学部留学経験者のすべての項目は国内学部卒業生よりも有意に高かった
- ・ 大学院留学経験者のすべての項目は国内大学院修了生よりも有意に高かった
- ・ 大学院留学経験者のすべての項目は学部留学経験生よりも有意に高かった

能力の向上に関する項目



- 「論理的思考力」「専門知識・技能」は大学院留学経験者、「異文化に対応する力」は学部留学で伸びを実感。(統計的有意差)

意識の変容に関する項目



— 学部留学 (415) — 大学院留学 (353) — 国内大学卒業 (710) — 国内大学院修了 (528)

大学院留学経験者の方が、学部留学経験者と比べて4つの項目

で有意に高い自己評価。平均値も概ねすべての項目で高い。

①留学経験者と未経験者・

学部留学と大学院留学経験者の比較

- 留学経験者と未経験者の比較
 - 留学経験者の方が、積極的に授業関連の活動に参加し、能力の向上、意識の変容について有意に高く自己評価
- 大学院留学経験者と学部留学経験者
 - 意識の変容は全般的に大学院留学経験者の方が高い自己評価（4/16項目では有意差）
 - 能力の向上については、「専門知識・技術」「論理的思考力」は大学院留学、「異文化対応力」は学部留学経験者が有意に高く自己評価

②授業に関する経験と、能力の向上、
意識の変容との関連

「授業に関する経験」 → 「能力向上」 → 「意識の変容」 の関連についての検証

- 学部留学経験者・大学院留学経験者の「意識の変容」に関連のある「能力の向上」に関する項目を特定する
- 相関係数を計算し、相関の低い項目を除外し、相関の高い項目をを中心に回帰分析に投入。回帰係数が統計的に有意な影響を示しているもののみを残した（5%水準）
- さらに「意識の変容に」影響を与えていた「能力の向上」に関連のある「授業に関する項目」を特定するため、同様の分析を行った。

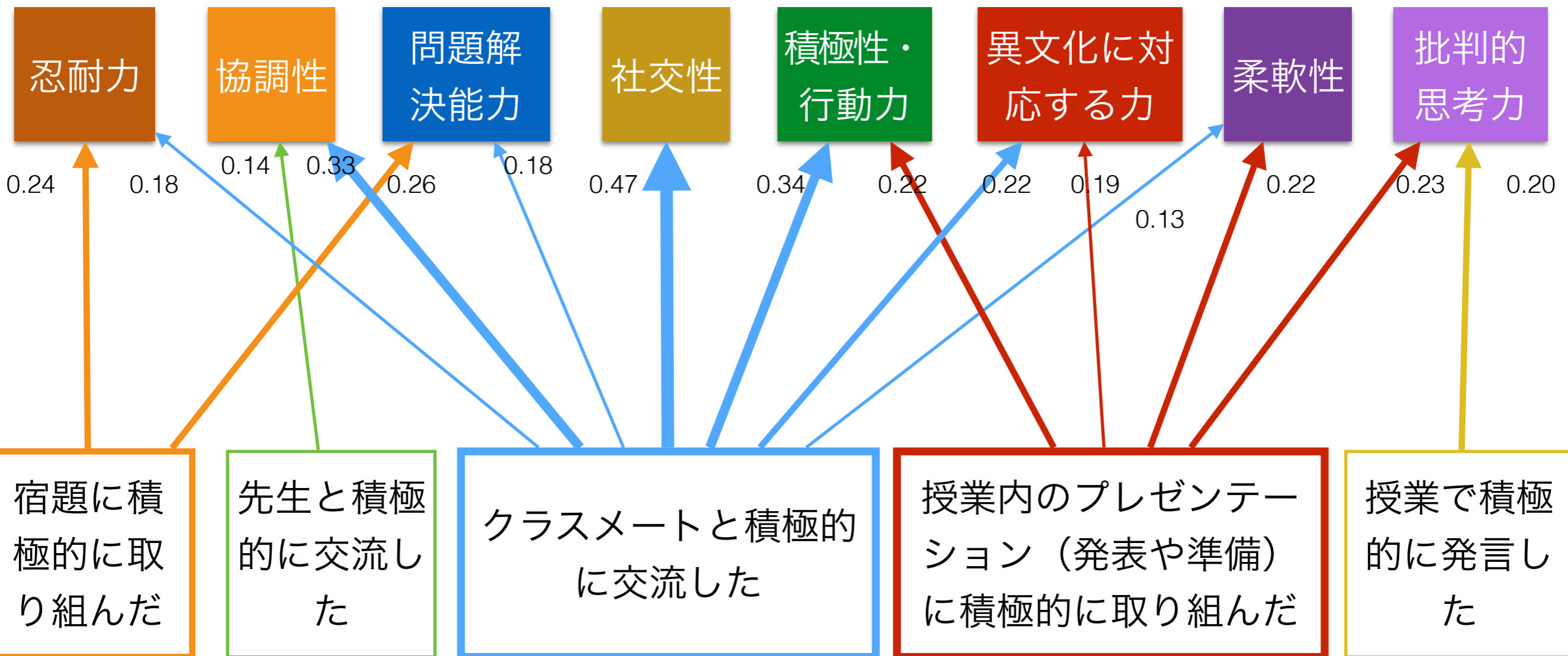
大学院留学

授業関連の活動の中では、クラスメートとの積極的な交流、授業内のプレゼンテーションへの取り組み、宿題への積極的な取り組みと、各種能力の向上の自己評価に関連が見られた。

粘り強い問題解決能力

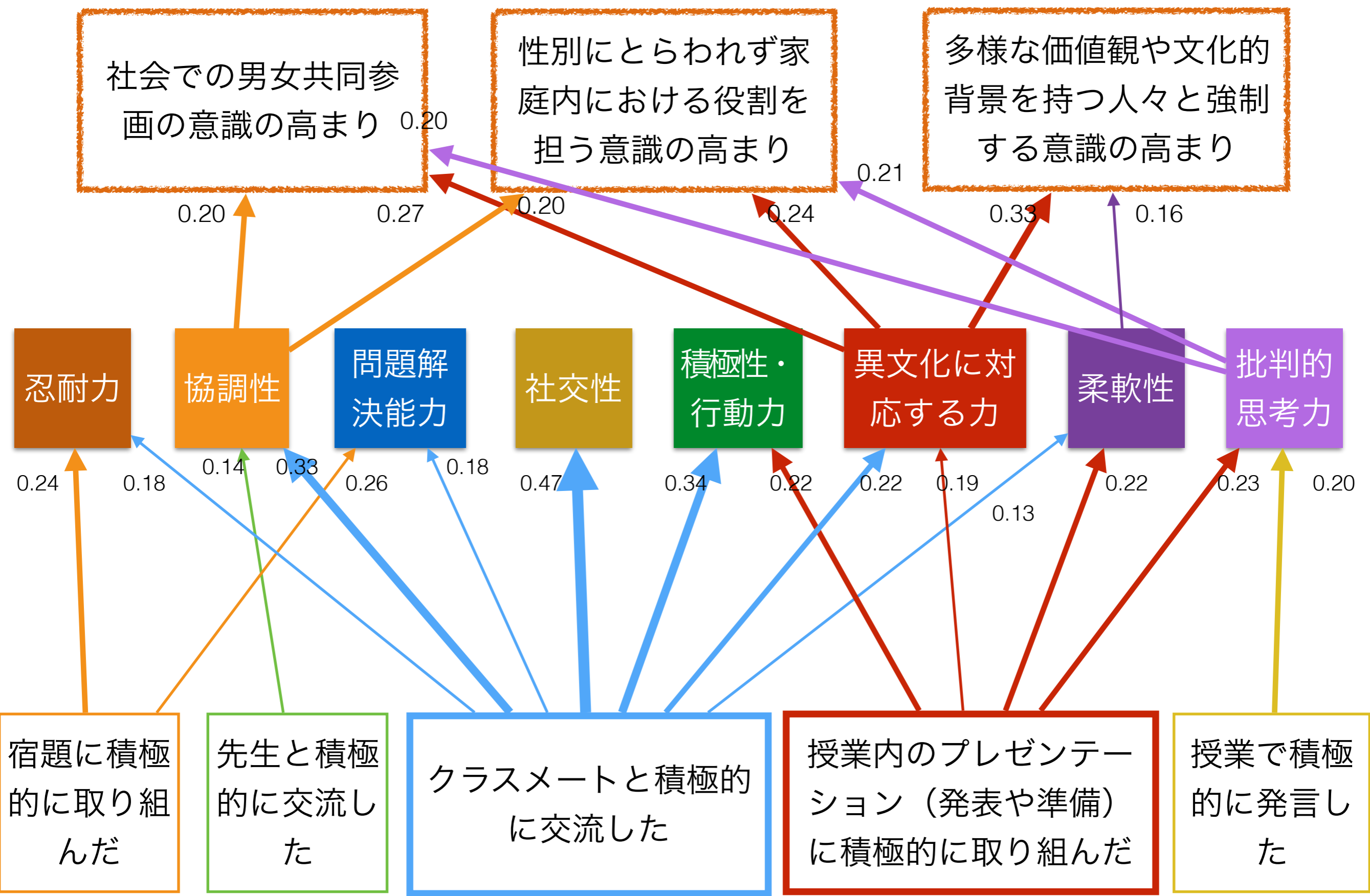
対人関係の能力向上

物事の捉え方に関する能力向上



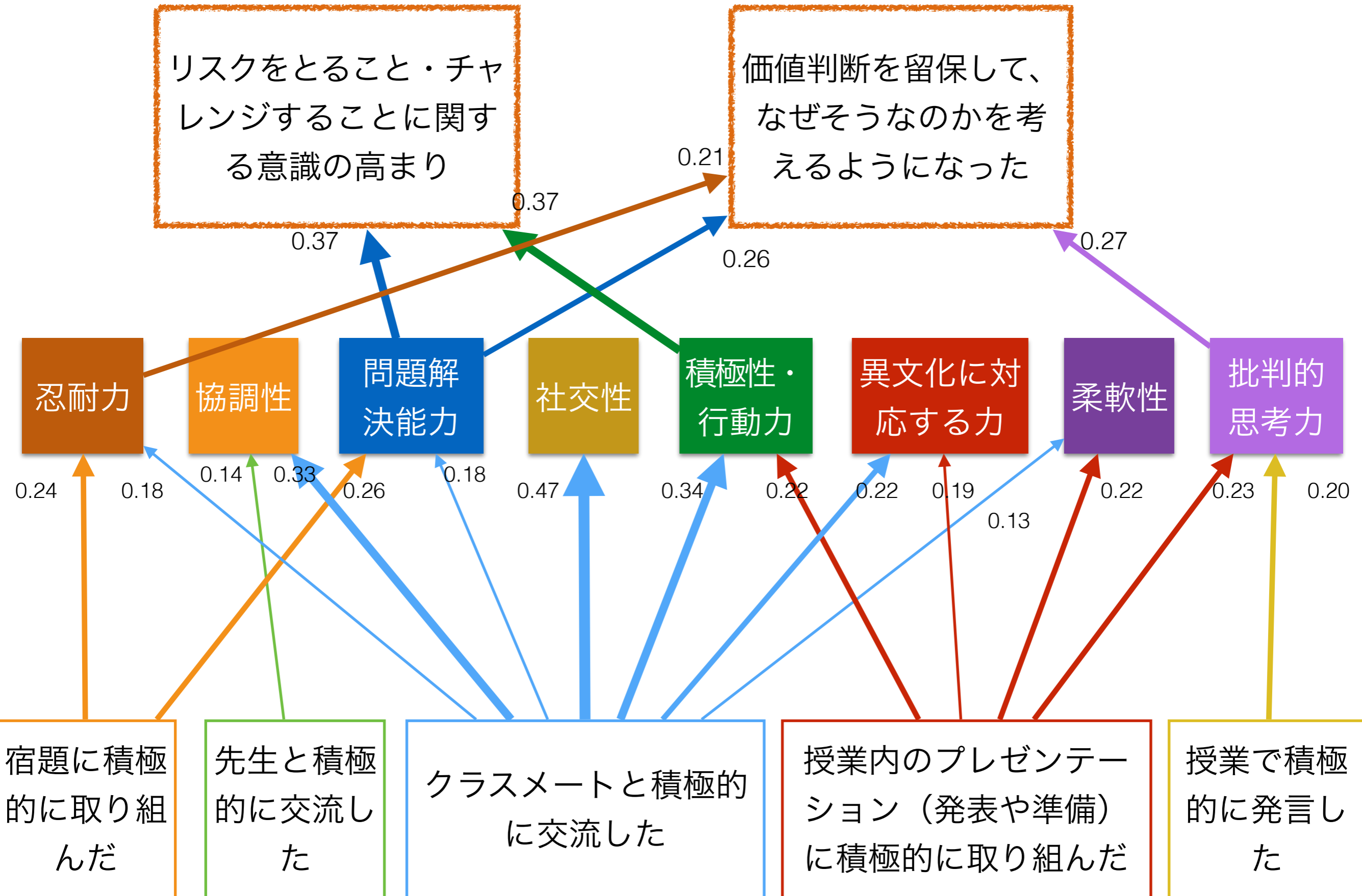
大学院留学

多様な価値観への意識の高まりには、異文化対応力・協調性・批判的思考力が効いている

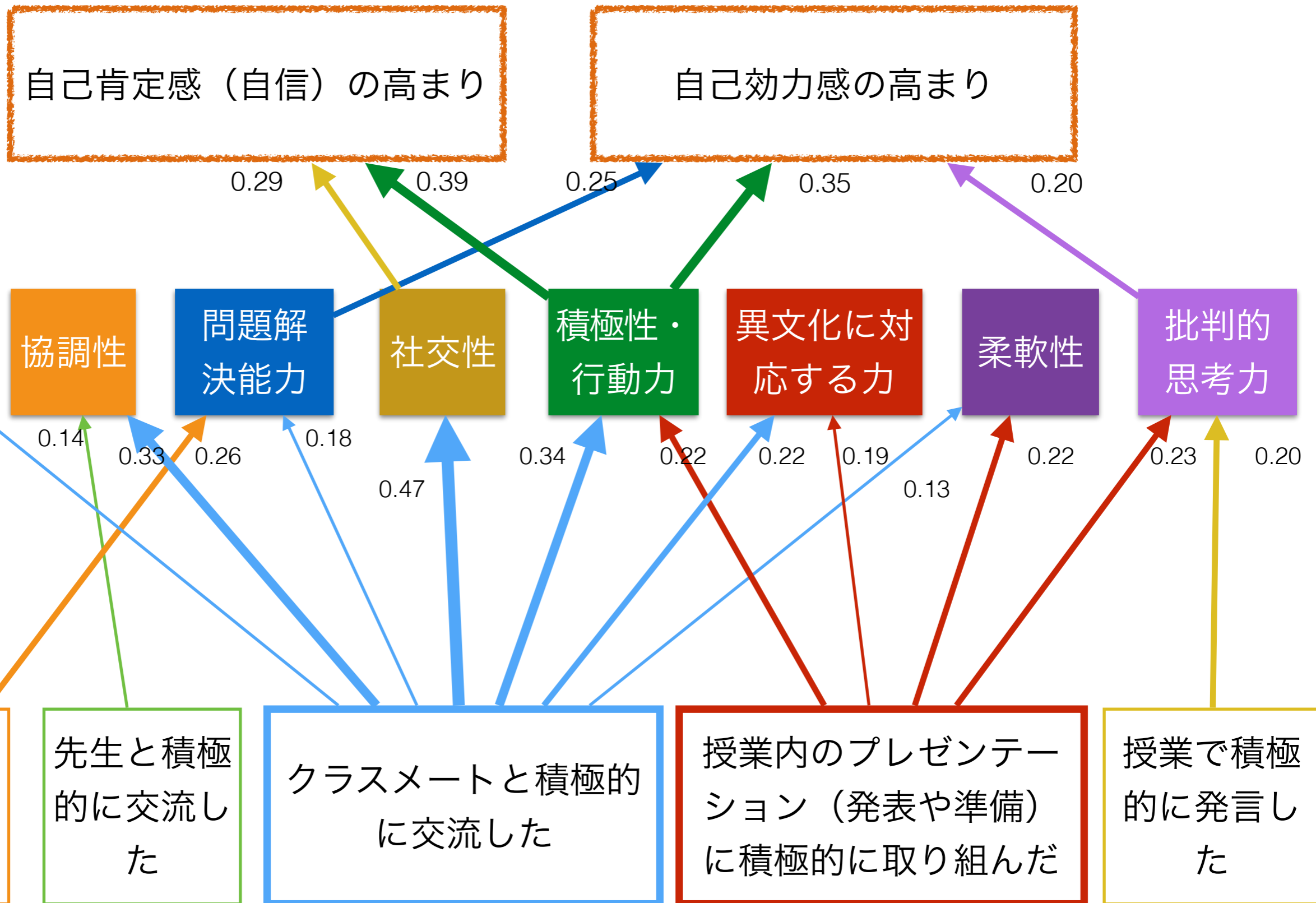


大学院留学

リスクをとることは、問題解決能力と積極性が、価値判断の留保には、問題解決能力忍耐力、批判的思考力、向上が寄与している。



自己肯定感・自己効力感の高まりには、積極性・行動力の向上が寄与している。

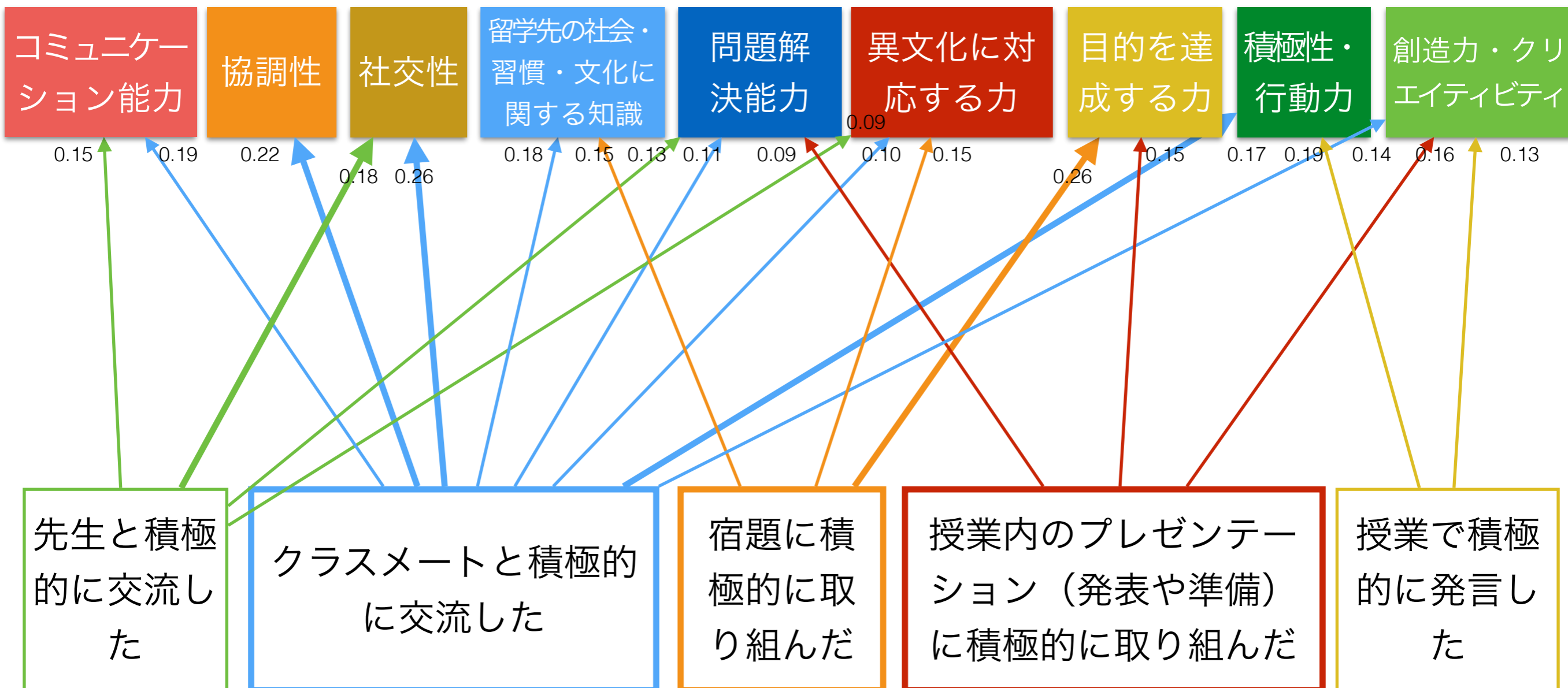


学部留学

学部留学経験者の方が、様々な授業の経験が能力向上に関わっているが、個別の回帰係数は若干低めである

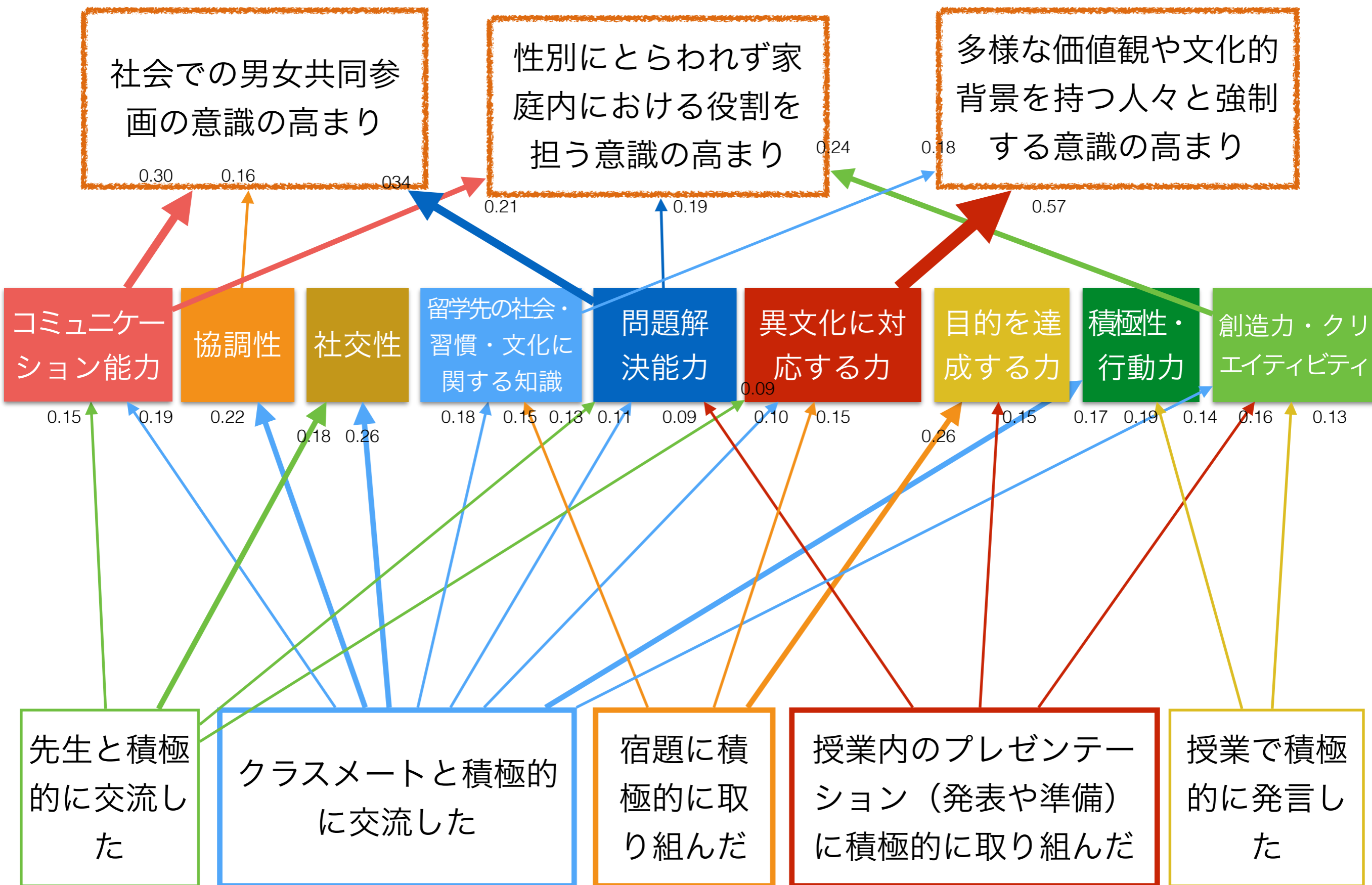
対人関係の能力向上

行動力・達成力を習得



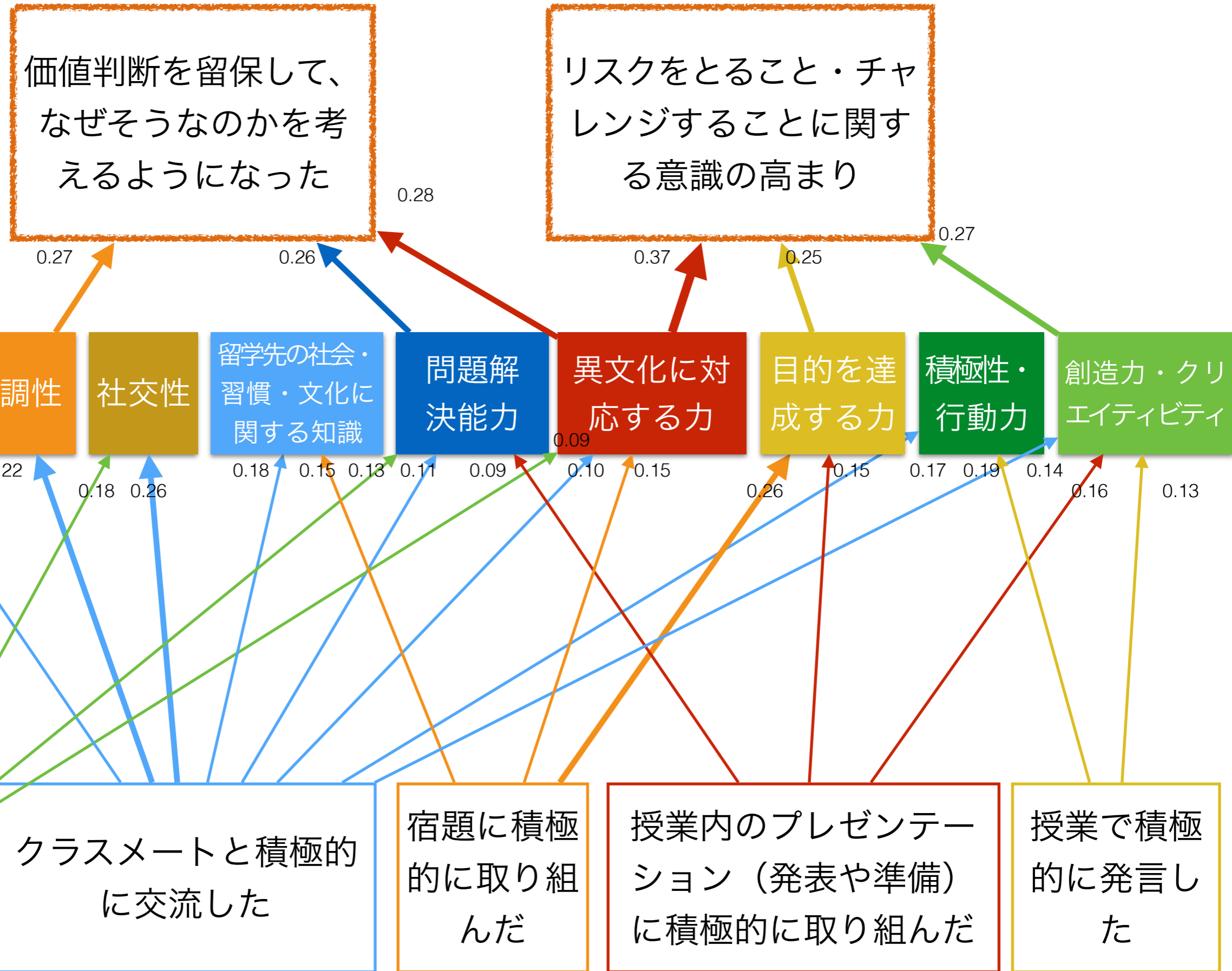
学部留学

性別役割に関連した意識の高まりには、コミュニケーション能力・問題解決能力の向上が関連している。



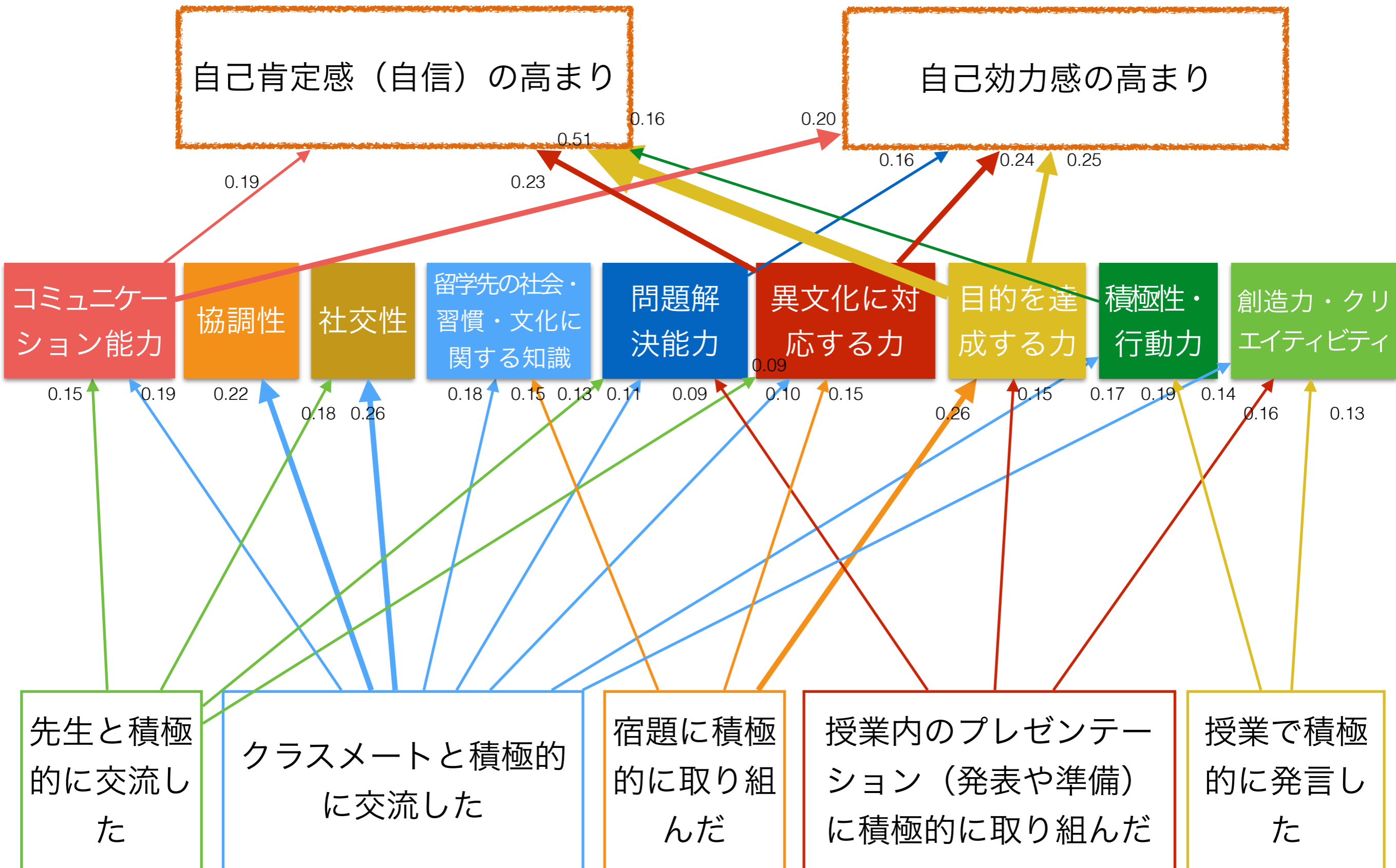
学部留学

異文化対応力の向上は、価値判断の留保・リスクテイクの高まりに関連している。



学部留学

自己肯定感・自己効力感の高まりには、コミュニケーション能力・異文化に対応する力・目的を達成する力の向上が寄与している。



まとめ①

授業関連活動、能力向上、意識変容の自己評価

- 留学経験者の方が総じて授業に対する積極性、能力の向上、意識の変容に関する自己評価は高かった。
- =>留学経験を通じて、留学経験者は授業関連の活動に積極的に取り組み、様々な能力を向上させ、意識の変容がもたらされており、留学は、経験者にとって変容的学習の機会となっていると解釈できる。

まとめ②授業関連の活動と能力の向上

- 大学院留学経験者と学部留学経験者では、大学院留学経験者の方が授業活動へ積極的に参加し、専門性・論理的思考力を高め、世界の事情に関する関心も高まっていた。学部留学生は異文化対応力が特に高まっていると評価していた。
- => 大学院留学経験者はより積極的に授業に参加し、専門的な能力向上や意識の変容を得たと認識しているのではないか。
- 中でも「クラスメートとの交流」が様々な能力の向上に関連していた。
- => 現地の学生との交流が、留学経験の中で、批判的省察の機会を促し、成長や変化につながる鍵となる経験と成る可能性。

まとめ③能力の向上と意識の変容の関連

- 大学院留学経験者と学部留学経験者では、意識の変容に寄与する能力が異なっていた。
- 大学・大学院という留学先機関特有の経験の違いによるものか、年齢など個人の背景の違いか。さらなる分析、考察が必要。

まとめ③能力の向上と意識の変容の関連

- 例) 大学院留学経験者の性別役割に関連した意識の高まりには、異文化対応力・協調性・批判的思考力が効いていた
 - 性別役割に関する意識の克服を異文化への対応として捉えている可能性
 - 批判的思考によって、日本の性別役割を批判的に捉え直している？
 - 協調性の高まりが、男女問わず協力できるということにつながっている？
- 学部留学経験者の性別役割に関連した意識の高まりには、コミュニケーション能力・問題解決能力が効いていた
 - 異文化の問題としてではなく、コミュニケーション能力の問題としてみている？
 - 学部留学者は比較的若く、社会人を経験していない人も多いなど、文化的な男女の役割を内面化していなかった可能性。
 - 問題解決能力の高まりとして、現状を問題として捉えているか？

今後の課題

- 因子分析・共分散構造分析などを用いて、さらに変数間の関係性について精査し、モデルを構築したい
- 授業以外の経験、苦勞した経験についても、能力向上や意識の変容に影響を与えるのか分析をしたい
- インタビュー結果により、今回の分析結果を補完する必要がある

参考文献

- Mezirow, J. (2000). *Learning as transformation: Critical perspectives on a theory in progress* (1st ed.). San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Mezirow, J. (1991). *Transformative dimensions of adult learning* (1st ed.). San Francisco: Jossey-Bass.
- O'Rear, I., Sutton, R. C., & Rubin, D. L. (2011). The effect of study abroad on college completion in a public university system.
- Paige, R. M., Fry, G. W., Stallman, E. M., Josić, J., & Jon, J.-E. (2009). Study abroad for global engagement: the long-term impact of mobility experiences. *Intercultural Education*, 20(sup1), S29–S44. <http://doi.org/10.1080/14675980903370847>
- Vande Berg, M., Connor-Linton, J., & Paige, R. M. (2009). The Georgetown Consortium project: Interventions for student learning abroad. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 18, 1–75.
- 日本学生支援機構. (2005). 平成16年度「海外留学経験者の追跡調査」報告書：海外留学に関するアンケート. Retrieved from http://ryugaku.jasso.go.jp/datas/master_link_details/pdf/020150216175505_A8Usl.pdf
- 日本学生支援機構. (2012). 平成23年度「海外留学経験者追跡調査」報告書：海外留学に関するアンケート. Retrieved from http://ryugaku.jasso.go.jp/datas/master_link_details/pdf/020150216173809_WthAf.pdf
- 野水勉, & 新田功. (2014). 海外留学することの意義：平成23・24年度留学生交流支援制度（短期派遣・ショートビジット）追加アンケート調査結果分析結果から). *ウェブマガジン留学交流*, 40, 20–39.
- 藤村好美. (2006). ロバート・D・ボイドの変容的学習の理論に関する一考察：変容のプロセスにおけるGrief（悲嘆）の持つ意味を中心に. *広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部*, 55, 53–60.